

4 作業学習の授業計画とPDCA

作業学習の実施に当たり、生徒一人一人の実態に基づいて、学習指導案を作成します。生徒が「今できること」を大切にし、生徒がもっている力を最大限に発揮できる学習にすることが大切です。

①実態の把握 「できる」ことを丁寧に観察・把握する

- 作業学習に関することに焦点化して、生徒一人一人の「～できる」を大切に観察・把握した実態を記述しましょう。
- 「～できない」といった記述ではなく、「～すれば～できる」と記述することにより「指導の手だて」がより明確になります。
- 生徒が自分の得意なことが分かり、作業学習の中で十分に発揮できるようにしましょう。

②目標の設定 「何を学ぶのか」

- 作業学習を通して職業的自立を促すために必要な目標として、「どのような姿を期待するのか」「どのような力をつけたいのか」「どのような力をさらに伸ばしていきたいのか」を具体的に記述しましょう。
- 校外での実習の時の記録や、企業や卒後の進路先が求める力も考慮して目標を設定しましょう。



③指導内容の精選・指導方法の工夫 「どのように学ぶのか」

- 生徒が作業学習に取り組む喜びや完成の成就感を味わえるようにするとともに、一人一人の実態や目標に基づき工程の分担をしましょう。
- 各教科等の内容との関連を十分に図り、作業学習の時間だけでなく他の教科等で学んだことを発揮できるようにしましょう。
- 4つの視点に基づき、指導内容・方法の工夫をしましょう。



④作業学習の実施

- 生徒が主体となり、自分一人で作業が行えるようにするために、教員の関わり方や支援の方法を整理した上で、作業学習を担当する教員同士の共通理解を図りましょう。
- 工程の中で、生徒同士が協力する場面を意図的に設定するなど、生徒の役割への理解や責任・参加意識を高めるようにしましょう。
- 十分な作業量を確保し、作業の途中で「作業がない」といった状態にならないようにしましょう。
- 教員は、生徒からの依頼に基づいて最小限の支援をしましょう。



⑤適切な評価

- 生徒の変容・成長を確かめるもの
「生徒の働きぶりにどのような変化があったか」
「どのような力が身についたか」
- 教員が自身の指導の効果を確かめるもの
「適切な目標の設定がなされていたか」
「支援の方法やタイミング、量は適切であったか」



5 4つの要件に基づく授業改善

■ 工程の工夫



作業を順番に行い、待っている間、生徒が何もやっていない。



作業工程を見直し、生徒一人一人に合わせて担当を分担した。

- 待っている時間が無くなり、工程の分担ごとに作業を進めることができた。
- 生徒同士で、身体の動きの制限や理解力に合わせた工程を考え、協力し合うようになった。



「文化祭で販売する」という目標が分かりにくい。



文化祭までの目標数をパネルにして示した。

- 工程の分担ごとに目標の確認ができるようになり、作業の正確性や目標数への意識が高まった。
- 目標数に対する到達度が分かりやすくなり、出来高を意識する生徒が増えた。

■ 補助具等の開発



スタンプを一定の場所に押すための補助具



A4の用紙を三つ折りするための補助具



土や肥料を均一に混ぜるための道具

■ 環境作りの工夫



- 生徒がプリンターに行くための動線の確保や、室内の明るさ、生徒同士の協力のしやすさの観点から教室の配置を見直した。



■ 教員の関わり方

○支援の方法

言語指示・身振り・手本の提示・手添えなど、様々な段階の支援方法がありますが、生徒の作業状況に合わせて、最も効果的な方法を選択して、適切なタイミングでの支援を行うとともに、必要に応じて、これらを組み合わせて支援をすることが大切です。

工程や手順表、補助具等の工夫を行い、生徒が理解できる（一人でできる）ようにしましょう。



○教員の位置

作業学習を行う上で、支援を行う教員の基本的な位置として、

- ・生徒の表情が見えて視線を合わせられる位置
- ・生徒の視界には入らないが、そばにいることが分かる位置
- ・離れてはいるが、報告・連絡・相談ができる位置

が考えられます。

作業学習では、生徒の作業状況に応じて、適切な位置からの支援が必要になります。真正面や後ろから生徒の作業を常に「見て」、言葉での指示をすることは適切であるとはいえません。生徒によっては、教員が生徒の横の位置で同じ方向を向いていることで、生徒が手順を間違えたり、「やりにくい」と感じたりした時にすぐに支援をすることが有効なことがあります。



※ 4つの視点に基づく授業改善事例は、特別支援学校の教育内容の充実（平成26年3月東京都教育委員会）及び各教科等を合わせた指導の充実（平成27年3月東京都教育委員会）を参考にしてください。



6 作業学習を実施するに当たって

■ 目標を設定する

一定の時期ごとに、生徒がやり遂げられる目標（数値、品質等）を設定し、それに応じた一単位時間ごとに達成すべき目標を設定することが、生徒が活動に取り組む喜びや完成の成就感につながります。そのためには、年間の授業計画をいくつかのまとまりで区分するなど、生徒自身がその期間、期間で作業学習の目標の違いを把握しやすくする工夫が有効です。



■ 環境の設定により生徒が「できた」ことで終わらせない

生徒ができない作業がある場合、その原因は生徒の障害に起因するものではありません。生徒の現在の作業状況を把握し、工程を見直し、必要に応じて補助具を工夫することで、生徒が一人でできるようになります。

このときの生徒の「できた」という変容は、「生徒が持っている力を発揮できるようになった」と言えます。再度、現在の作業状況を丁寧に把握することで、生徒のさらなる変容や成長を促すことができるようになります。



■ 支援の方法や評価の観点を共有する

作業学習は、任された役割を遂行する知識・技能・態度を身に付ける学習であるといえます。このため、生徒の評価に当たっては、作業の結果だけでなく、生徒の「働きぶり（自分の任された役割を果たそうとする態度）」や「生徒同士の関わり方」などの小さな変化を見落とさず、作業学習を担当する全ての教員が生徒の活動を把握しておくことが必要です。



■ 生徒に確認する

生徒主体の作業学習にするためには、まず、教員が作業をしてみて、効率や品質を確認した上で、生徒が「やりにくい」工程がないかを見極め、より「やりやすい」工夫をする必要があります。補助具の利用や作業台の配置、姿勢など、「どちらがやりやすいか」を生徒自身が確認できるようにしましょう。

また、支援が必要な時に生徒から依頼できるようにするために、代替コミュニケーション手段等を活用することも有効です。

■ 全校で組織的に取り組む

作業学習についても、各教科・領域との関連を図り、学校の教育活動全体の中で、意図的・計画的に進めていく必要があります。その際、生徒一人一人がどのような役割を地域や社会の中で担い、積み重ねていくのかといった**キャリア教育**の観点から、全校で組織的・継続的に取り組んでいくことが重要です。